

基にして — 」と決り、その後の執筆はすらすらと進んだ。

「地理量」は、上述のように地理学的諸要素の相関量で、例えば雨と侵食量、風と災害量、気温と生産カロリー、人口と都市面積、工業と都市力、GNPと農業の労働生産性……、つまり自然と自然、人文と人文、自然と人文に及ぶ広汎な相関量である。そしてこれは恐らく何千とあろう。これらがまとまって通覧できれば、どんなに地理学自身のためにも、また周辺科学のためにも貢献するだろうか。

筆者の予想から云うと、「零の発見」が数学に与えた意義と、「地理量」の編集・出版が地理学に与えるはずの科学的意義とは、勝るとも劣らないと考えるのである。もうこれに関して科学研究費の申請もすませた。その採択について「神々よ照覧あれ」という気持で今はいる。

## ニュージーランドだより

浅 海 重 夫

ニュージーランドに行ってきますという、いい所だそうですねえとうらやましがる人と、なんでもそんな所へ行くのかと半ばあきれ顔の人とふた通りあった。どちらもこの国のことを必ずしもよくは知らず、また私の訪問の意図を知るよしもないのだから無理はないが、ひと月余りこの国を歩き廻った今、帰国したらさっそくに、よい国ですが人によってはつまらない所と思うかも知れませんかと答えるつもりでいる。自然は多様だが人間の歴史は浅く、どの町もどこの人も皆画一的に見える。物騒な話や面白い事件もなく、国民はのんびり自分たちの生活を楽しんでいる。日本と同緯度で同じ環太平洋造山帯の小さな島国であり乍ら、なぜこうも違うのかと思うことが沢山ある。一見似ていて実は大違いというのを探しながら歩けば、結構退屈しないでいられる。

北島には多くの火山が分布し、富士山と相似のマウントエグモント、温泉やスキーの行楽地ロトルアの他、日本の火山地域と同様なテフラの累層も随所にみられるが、活火山は日本より少しおだやかで、地震もそれ程脅威的な存在ではない。火山灰土壌は日本の関東ロームの土壌と土性・構造の上でかなり違う。風化・土壌化の速度と経過の長さの違いによるらしい。北島の北端近くには亜熱帯植物が分布し、オークランド周辺の海岸低地にはマングローブが茂っている。南島にはすばらしい山岳氷河があり、この点は日本とは真向から違っているが、南半球におけるこの氷河も現在

(Holoceneにおいて)縮小の傾向が著しいことは、氷食谷内のサイドモレーンの段丘化とターミナルモレーンの歴史時代における後退現象で明らかである。

ニュージーランドの歴史時代といっても、それは1800年代初期までのマオリ族の居住と、19世紀の開拓時代の白人の移住にすぎず、この国の歴史はマオリ文化と開拓期の蓄産・鉱産の発達史に限られる。都市の広い公園にあるそれぞれの博物館はそれらの僅かな文化遺産を誇り(?)として展示している。島国ニュージーランドにもオーストラリアと同じような見渡す限りの牧草畑の丘陵に、人口の20倍いるという羊が、いつもどこか片すみに群がっている。全く羊とか牛とかいう動物は不経済でぜいたくな物だ。そしてしょっちゅう草ばかりたべている。日本にこんな広大な土地があったら、広い庭つきの1戸建住宅を沢山供給できるのに。

ニュージーランドには人口3万以上の都市が9つ、そのうち大きい方の7つをすでに見てきてしまった。大学は全国に6つ。来年IGUの開かれるバーマーストーンノースの大学だけを除き、5つの大学を覗いてきた。つまりそれしかないのに至極簡単である。しかしこの国でも今建築ばやりで、都市では大きなホテルらしいビルがクレーンをふりたて、大学も各所で増築に懸命というところ。建築委員会がさぞ忙しんでいるだろう。ウェリントン郊外のニュータウンは目下牧草畑を農民から買いとった建築業者が、色とりどりの1戸建売新住宅を建ててさかんに購売欲をあおっている。この新住宅は日本でも最近はやりの何とかハウス式のデザインで、従来のイギリス的屋敷とガラリと変った町の風貌をみせる。建材はすべて移入種(パイン)の植林の材を使い、鉄骨・コンクリート・新建材は使わないようだ。人口の都市集中がとくに著しいこの町で、郊外からの移入者、および新家庭をもつ若夫婦のすまいとなる。

物価はオーストラリアほどではないがかなり高いと感ずる。しかし福祉国家で、カギをかけないホテルもたしかにあり、女が偉かったのか男が賢かったのか知らないが、世界最初の婦人参政権獲得の誇り高い国、マオリ人あるいはその気のある人たちも、また東洋人・日本人も全く差別感を覚えずに暮している(と思う)。服装は世界の流行どおりだが、とくに男はヒゲが多く、夏に向って半ズボン姿が目立ち、女は多様で短かいのからひきずるように長いので、高いかかとの靴もいればどうかするとハダシの娘もいる。

日本とニュージーランドは赤道をはさんで対称の位置にあるが、地球上でニュージーランドの正反対(antipode)はスペインあたりにあたる。面白いことに、オークランド市内の旧火山頂の展望台に世界主要都市(見えるはずはないが)の方向をかいた標示板があって、東京がロンドンとパリのちょうど中間にある。ニュージーランドは日本よりもさらに日出づる国で、時差は3時間ある。最後に、南半球に旅行した人は大抵南十字星に関心をもつと思うが、南十字星はこの国の国旗に

もなっているくらいだから是非見たいと思っていた。ところが今の季節では早朝でないと見られないので、なるべく南に移動した時と考えて最南端のインバーカーギル市の宿に泊った日の翌朝4時に目ざましい時計で起き、東の空のそれとおぼしきあたりに十字星を発見、何のことはなく既に空高く昇っており、やや横たおしの姿勢だがそのとなりのケンタウルス座の $\alpha$ 、 $\beta$ 星と共にさんざんとまたたいている。それよりなお異様であり圧巻なのは、オリオン座が北の空に完全にさかさになって（当前だが）かかり、三つ星をその方向にのばした先に大犬のシリウスを経て南十字星がましますということもわかった。地球のまるさを観念でなく実感として味わう思いがして、しばし寒さも忘れて戸外に立ちつくした。（ニュージーランド、オークランドにて） 11月23日

## 西ドイツの女子学生

式 正 英

ミュンヘンでの私の生活を豊かにした原因の一つは、学生達と付き合う機会を持てたことである。大学では私の研究テーマと希望に従って、教官達がフィールドを代る代る案内してくれたので、随分と啓発されることが多かった。ゼミや講義にも参加を許されることがあり、私が紹介されると学生達は机を左のこぶしで一せいに叩いてみせた。拍手ではないこの動作に初め何事かと思ったが、これが歓迎の意志表示だと知って安心した。どの講義室でも女子学生は4分の1位の数だった様にする。教官のスケジュールとは別に、この学生達が実に能く面倒を見てくれたのである。

ルイーゼは地理の3年生、朗らかで世話好きで、とても好く気の付く娘である。彼女は私のベンジオンから歩いて5分位の所にあるテング通りに面するアパートの5階に、ボーイフレンドのウーリッヒと住んでいた。ウーリッヒも地理2年の学生で、学力の優れた好青年で教師志望である。階段をあがりつめた最上階の彼等の住居は、大きな部屋が3つも4つもあって一家庭が住まうのに充分である。キッチン、浴室、ロビーは共用だが、個室は夫々別けている。日本では余り考えられない生活様式だが、結構うまく暮している様に思われた。ウーリッヒは彼女の亡くなった父親はマックス・ブランク研究所に勤めていた物理学者であり、彼女を尊敬しているので結婚したいともらしていたが、ルイーゼは当分結婚する気はないと云っていた。

学生食堂（メンザ）はテー・ハー（工科大学）に所属しているのが、ルイーゼン通りの地理教室